

# アトリエ 琉游舎 だより 91号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/) 2020年11月4日発行  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

## 日蓮は柿と葡萄にあき給ひ

- 前回この欄で「秋の川柳で古典と言われるものが見当たらない」と書いたところ、44年来の親友から私の勉強不足も含めていろいろな示唆をメールで頂きました。江戸の川柳集『誹風柳多留』から秋の景物を織り込んだ秀句も教えてもらいました。その一つが上記の句です。
- 彼によれば「川柳は時々の生活・風俗に根差し機知を梃子に諧謔を生む文芸なので、同時代の生活・風俗を知り、俗語や隠語も含めた当時の言葉を理解していないと、何が面白いのかわからない句も多く、また古川柳はバレ句（艶笑的な句）が多く、あけっぴろげには語りにくい側面もある」ことが今ひとつ川柳の面白味の分かりづらさだとのことです。納得です。
- 推薦の句から私に所縁のある川柳を選んでみました。日蓮聖人が晩年を過ごした甲州身延山は今の山梨県です。生涯不惜身命、我が身を顧みず全てを捧げて倦むことなく布教してきた聖人も、甲州の秋の名物、柿と葡萄はさすがに食べ飽きたという句です。秋と飽き（あき）を掛け詞にして、面白味と聖人の人間味を表現しながら甲州の名産品もアピールしてますね。
- 日蓮聖人は現代に於いては毀誉褒貶・好悪相半ばですが、江戸時代の庶民の人気は絶大で、厄除けのお祖師様（おそっさま）と呼ばれ強い信仰が寄せられていました。当時の人気を偲ばせるような句であり、また柿と葡萄は江戸からずっと甲州特産品だったことも驚きです。
- 秋の初めに秋田出身の宰相が誕生しました。菅（すげ）はカヤツリグサ科スゲ属の多年草の総称。至る所に生え菅刈をして笠や蓑や縄などの材料とします。その菅が有用だったのも今は昔、今や荒地や河原に放置され雑草以上に始末に負えない厄介者、魑魅魍魎の住処です。
- 菅と菅に何の関係もありませんが、鬱憤を諧謔とこじつけで結ぶのが庶民の知恵。お粗末ですが一句 “菅刈にすげかえあきゑ枯れ尾花“ 魔女刈りや首のすげ替えは見飽きたので早々に安倍川餅同様、菅笠の正体を見たいものですが、正真正銘の幽霊だったらどうしましょう。

### 11・12月スケジュール

		木		金		土		日	
		5	6	7	8	9	10	11	12
		映画会 13:30							
9	10 読書会 13時半	11	12 映画会 13:30	13	14 詩話会 13時半	15			
16	17	18	19 映画会 13:30	20	21	22			
23	24 読書会 13時半	25 居酒屋の会 16時半	26 映画会 13:30	27	28	29			
30	12月1日	2	3 映画会 13:30	4	5	6 写経会 13時半			

**読書会**  
11月10日(火)  
11月24日(火)  
13時半から

**詩話会**  
11月14日(土)  
13時半から

**写経会**  
12月6日(日)  
13時半から

**居酒屋の会**  
11月25日(水)  
16時半から

**映画会**  
毎週木曜日  
13時半から

秋らしい秋晴れが訪れないままに、紅葉がそろそろ平地までおりて来たようです。地球温暖化による気候変動か、地球生命の営みのちょっとしたバイオリズムの変化か、近年は毎年「いつもと違う秋」を感じてしまっています。今年からはらっとした晴天が少なく、夏以来山頂からは何も見えない山歩きが続いていました。重い雲に覆われ間近な人の姿さえもよく見えない頂上では、どんなに想像力を働かせても快晴時の雄大な眺望は浮かんできません。3時間の登りに疲れ頂上でおにぎりを食べる他にすべもなく、そそくさと下山です。ところが小一時間ほどして振り返ると山は快晴。頂上もきれいに見えます。”これもまたありのまま”と思うまでの度量は私にはなく、悔し紛れに二度と来るものかと山への恨み言。まだまだ修行が足りません。

秋晴れの休日が待ち遠しい中、10月25日（日）やっと快晴の予報が出ました！喜び勇んで早朝5時の出発。高速を北上して6時半安達太良山登山口に到着。雨、気温6度、強風。白河を過ぎたあたりで時々雨粒がフロントガラスに当たっていましたが、天気予報の快晴マークを信じ切って、単なる明け方のわか雨程度に考えていました。登山口で待機すること40分、さらに雨は安定して降り続け雲が停滞してしまいました。恐らく頂上付近は霏か雪でしょう。撤退です。帰りの高速も白河を過ぎるまでは断続的な雨。南の空は晴れているのに、西側から時々雨雲が流れてくるようで、那須連山の福島側に雲が取り付いています。ところが栃木県内に入ったとたん快晴の秋晴れです。白河の関を境に北側は日本海からの湿った冷たい空気が流れこみ、冬が始まっていました。今まで幾度となく車で白河の関を行き来していましたが、那須と白河の間が古来地形による人為的な境界であっただけでなく、自然現象の境界でもあったことを強く実感させられた日でした。

山や川や海が作る地形的な境は往来の他にも気候や作物、言葉、気質、境遇などの境界を形成し、いずれは国や思想・経済、民族の境となっていくでしょう。すると必然的に、こちら側とあちら側という峻別が作用し内側へは求心力、外側へは対抗心が働いていきます。これは国や社会などの集団を維持するための本能なのでしょう。そんな時人は自由や友愛よりも差別や闘争の感情に基づいて行動してしまう生き物なのです。今から私が語ろうとする自由や友愛は、いわゆるフランス革命以降西洋民主主義の根本を支え続けた文脈ではなく、仏教の教えのなかに存在する自由と友愛です。今行われているアメリカの大統領選挙や、表現の自由を揶揄や嘲笑と恣意的に混同しているフランスの風刺漫画騒動の状況を観察するにつけ、彼らの主張する「自由」や「友愛」は境界の内側への求心力を維持するための論理であることは明らかです。自ら境界を作りそこで「自由」と「友愛」を叫んでも、生まれる感情は向こう側を差別し闘争を煽るだけなのです。

仏教でいう自由は何事にもとらわれない状態を指します。物事を分別し内外の境を設けるのではなく、ありのままに観て自ずから由として行うことが自由です。そこでは心理的物理的境界が取り払われた全き自在の世界。その象徴として経に描かれている存在が観世音菩薩、俗に言う観音さんです。観音さんは「遊於娑婆世界」で「三十三応化身」<sup>注1</sup>します。娑婆世界を自在に遊行し、世間の人々の救いを求める声を聞きつけるや、相手の姿に応じて千変万化に化身して、苦悩から私たちを救い出してくれる菩薩です。仏教の慈悲の精神である仲間に対する友情と悩めるものに対する同情とを人格化した存在が観音さんです。何ものにもとらわれないありのままの行い「遊」と、生きとし生きるものに平等に注がれるあわれみと慈しみの行い「慈悲」、これが仏の教える自由と友愛です。そこは境界のない所だけに可能な差別も闘争も無い世界なのです。

仏教用語の「境」は、土地や物事の境という用法ではなく、六根の認識対象を指します。六根は「眼、耳、鼻、舌、身、意」のことで五官と心の働き（意）のこと。この六根が認識する対象が境界です。これを六境といいます。六境は「色・声・香・味・触・法<sup>注2</sup>」のこと。人は目で美しい色を愛で、耳障りな声に耳を塞ぎ、いやな香りに鼻を曲げ、美味に舌鼓を打ち、汚物に触れて身を避ける。意識はこれは美、あれは醜と見る。これが六根が認識する六境です。私たちの六根は欲と怒りと無知の煩惱に支配されています。仏教ではその六根の分別する（六境）作用が人間の苦しみの原因であると考えます。私たちは「善・悪」「美・醜」などと、物事に判断の境界を設けることが認識であり知的な営みだと考えていますが、仏教ではそれを煩惱で汚れた状態の六根が認識する我見（邪見、誤った認識）だということです。我見に対する正見とは六根清浄、つまり煩惱をきれいさっぱり洗い浄めた状態でありのままに世界を観るということです。その正見によって初めて正行が可能になるのです。ありのままに観て（正見）ありのままに行う（正行）こと、これが「仏の自由と友愛」の実践です。世界宗教を精神的支柱とする人たちは、境界の内側で「自由」と「友愛」を標榜しながらも、その外側への「差別」と「闘争」を今に到るまで実践している事実は、もはやその宗教の本質がそこにあるということなのでしょう。しかし仏教は境を否定したボーダレスの中で初めて可能となる教えです。唯一「差別」と「闘争」を回避できる可能性のある宗教です。しかし境界内（社会）での実践が個人の覚りのための行いと両立する宗教であるかもまた私たち仏の弟子たちは厳しく自問しなければなりません。

この所日増しに朝の冷え込みが厳しくなってきました。私は知らぬ間に秋の盛りから晩秋への境に立っていたようです。境は目に見えるものでも手に触れられるものでもなく、心にいつの間にか忍び込んで来るものなのかも知れません。きっと境は私自身の心の産物なのです。この心の産物が日々の 琉游舎：戸井 出琉・恭子 行いの障壁となることのないよう、見えない境界を軽やかに行き来する お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 日々を、楽しく豊かに安らかに送りたいものと考えています。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850